

あの日を忘れないために 台風23号10周年メモリアル水防訓練実施

6月8日、台風23号10周年メモリアル水防訓練を、六方河川防災ステーション(台風23号立野大橋東側堤防決壊場所)で開催し、約260人が参加しました。

積み土のう工演習では、豊岡消防団や自主防災組織のほか、豊岡総合高校生も参加し、実際に土のうを作製して、積み方を学びました。



▲積み土のう工訓練の様子

その他、豊岡消防団が月の輪工(堤防斜面すそからの漏水箇所を土のうで半円形に包み囲んで拡大を防ぐ)、兵庫県建設業協会豊岡支部が重機を使用した大型土のう工・根

固めブロック据付演習を行いました。

また、会場には体験・見学コーナーを設け、多くの市民でにぎわいました。

国土交通省の「水害体験コーナー」では、実際に水が流れる中を歩いたり、浸水状態でのドアの開閉を体験でき、参加者は改めて水の脅威を痛感していました。

普段体験できない「消防はしご車」や建設業協会の「バックホウ」の体験試乗もとても好評でした。

恒例の自衛隊員による「炊き出し試食」(カレーライス)も行われ、約300食がふるまわれました。

また、水害体験・記憶を決して風化させないために「被災写真パネル展示」も行いました。

このような訓練を今後も継続し、地域防災力の向上を目指します。

無農薬栽培の技術向上を目指す 無農薬試験田で「ポット成苗田植式」開催

5月29日、みのる産業(株)本社・岡山県赤磐市との協定に基づき、祥雲寺の試験ほ場で田植式を開催しました。コウノトリ育苗お米生産部会の研修を兼ね、関係者は、ポット成苗を使った雑草対策の手法や田植機の操作などの説明を同社から受けました。

今後3年間、ポット成苗で



▲田植えと同時に米刈を散布
コウノトリ育苗無農薬栽培の実証研究を行います。

芸術文化による豊岡発信 舞台制作者シンポジウム開催

5月31日から6月1日まで、全国の舞台制作者が集まるシンポジウム「海を越えて地域とつながる」を城崎国際アートセンターで開催しました。

初日は、内覧会が行われた後、中貝市長が「コウノトリ共生という文化の世界進出」



▲ディアヌ・ジョスさんの講義

と題した基調講演を行い、豊岡を紹介しました。この日のプログラムが終わると、参加者は城崎を散策し、まちの魅力を味わいました。

翌日は、三つの講義があり、フランス大使館芸術部門主任のディアヌ・ジョスさんによる「フランスと日本 新たな芸術的協同に向けて」と題した講話のほか、山口情報芸術センター「YCAM」プロデューサー竹下暁子さん、静岡県舞台芸術センター学芸部の横山義志さんの講義が行われました。

主な市政の動き

- 14日・市民と市長の座談会(合橋、19日・福住、26日・竹野、6月1日・小坂、2日・竹野南)
- 15日・豊岡市新しい地域コミュニティづくり研修会
- 19日・市民と議会との懇談会(20日)
- 20日・「豊岡市生きもの共生の日」国際生物多様性の日啓発
- 26日・トライやる・ウィーク(31日)
- 28日・「チャレンジデー2014」参加
- 29日・豊岡市が国の地域活性化モデルケースに決定
- 30日・議会開会(6月25日)
- 31日・野外での今年初のコウノトリのヒナ巣立ち
- 6月
3日・第10回水害サミット(東京都)
- 7日・2013「植村直己冒險賞」授賞式・記念講演会
- 8日・台風23号10周年メモリアル水防訓練

小規模の発掘調査から大きな成果

出石焼発祥の陶器窯「桜尾窯」発掘調査現地説明会を開催

5月31日、桜尾窯跡発掘調査現地(出石町細見)で説明会を開催しました。

「桜尾窯」は、出石焼発祥の窯とされています。出石焼は白い磁器製品として有名ですが、江戸時代には九州の伊万



▲桜尾窯跡

里製品と類似した染付磁器でした。

この染付磁器の焼成が始まるまで、試行錯誤の生産段階がありました。最初に窯を築いたのが伊豆屋という屋号の有力者で、天明4年(1784年)から陶器製品の焼成を始め、その後寛政5年(1793年)には磁器の試験焼成に成功したとされています。

しかし、窯の存在や生產品の内容、その技術的なルーツは未確認のままでしたが、平成23年5月からの桜尾窯の発

掘調査によって、

さまざまな分かります。

判明し



▲出土した陶器

たのは、①伝承の窯が実在②連房の「登り窯」構造を但馬で初めて採用③「京焼・信楽焼」の18世紀後半頃の様相が強くなる④上品な丸椀・筒椀・香炉・燈明皿・土瓶などの施釉陶器が主体だったことなどです。

コウノトリ育む農法が「小さな世界都市 豊岡」につながる インターナショナルスクールの生徒が田植え体験

5月29日、インターナショナルスクール(名古屋校・同志社校)が、祥雲寺でコウノトリ育む農法の田植えにチャレンジしました。

子どもたちが、環境経済先進地の取組みを学ぶことで、心身ともに健やかに育つよう、平成25年度から実施されています。



▲初めての田植えにチャレンジ

コウノトリ育むお米の生産者から田植えのコツを教わった後、子どもたちは裸足になって田んぼに入り、手植えをしました。

笑顔あふれ、元気いっぱいの子どもたち。「生きものがたくさんいる」「土がヌルヌルしている」などの会話が飛び交い、歓声が響きました。

中貝市長の徒然日記 80

トップの言葉

平成16年台風23号による円山川の堤防決壊現場で、6月8日、水防訓練が行われました。参加者が土のうづくりにも励む姿を見ながら、当時のことを思い出していました。

真夜中。堤防決壊!との報告が入りました。騒然となりました。暗闇の中を濁流がごうごうと音を立てて市民を襲う光景が目につかびました。あれから、10年。

先日、城崎国際アートセンターで舞台制作者シンポジウムが開かれました。講師として来られたフランス大使館芸術部門主任のディアーヌ・ジヨスさんに「今日は舞台衣装のような(派手な)服で来ました」と言うと、「政治家というのは舞台の役者のようなものですか」と返されました。確かにそうです。

あの年の11月、参議院災害対策特別委員会に呼ばれました。発言の冒頭に言う言葉を決めていました。「心は被災地と共にありたいとの思いから、

防災服で出席しました」

翌朝のある新聞の但馬版には「心は被災地と共に」という見出しが躍りました。別の新聞には「市民一丸!」という発言が大きな見出しになっていました。

当時、みんなが市長を見ていました。私は舞台の役者でした。一挙手一頭足、励ますのだ、そう決めていました。

取材は全て受けました。マスコミの向こうに被災した市民がいたからです。NHKの番組で、司会者から質問がありました。「中貝さん、国や県に対し何か要望がありますか?」「私たちは立派なホールが欲しい訳ではありません。市民の普通の暮らしを取り戻したいだけです。それは私たち自身でやります。国や県はその支援をお願いします」

しばらくして市役所に手紙が届きました。「水害のこんな町を出ようと思っていました。でも、テレビで市長の言葉を聞いて、残ろうと思えました」

私は、舞台の上の役者なのだ、今もそう思います。